
あるバスの終点で

宮迫 和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるバスの終点で

【Nコード】

N1039R

【作者名】

宮迫 和音

【あらすじ】

恋人から別れを告げられて、心が曇る私の前に現れたのは名前も知らない男の子でした。

雨が降り始めた。

丁度、今の私の気持ちと同じようなどんよりと灰色をした空。
約1年付き合った彼氏にさっき言われた言葉、

「別れよう。」

ショックだった。別れなくなかったけれど私は、「うん。」と言っ
てしまった。

自分でも、なぜその言葉が出たのかわからない。

雨のなか傘を差さずにバス停を目指す。

ふと反対側の道路に目をやると、彼の姿があった。

彼は私の知らない女の子と1つの傘に2人で入っていた。楽しそう
に何か話してる。

ああ。そういう事か。

見たくなかった。

やっとバス停にたどり着き、バスを待つ。

雨で濡れた体に冷たい2月の風が吹き付ける。

5分ほど待つとバスが来た。

バスに乗ると車内の暖かさで気持ちが少し落ち着き、ある疑問が浮
かんだ。

どうして涙がでないんだろう。

悲しいはずなのに…

「お客さん、終点ですよ。」

その言葉に追い出されるようにバスから降りる。
寝てしまったのか。

知らない町。

反対側のバスに乗ればすぐに帰る事は出来るけれど、もうしばらくここにいたい。

バス停のベンチに座っていると涙が溢れた。

悲しい。

悲しい。

悲しい。

その気持ちでいっぱいだった。

何分経っただろうか。

バスが来て、男の子が一人降りて来た。

自分と同じ制服を着た男の子。

彼は私に言った。

「どうしたの？」

「…なんでもない。」

「なんでもない訳ないだろ。泣いてんじゃん。」

私は、何も言わなかった。

「ま、見ず知らずの人に言えないよな。」

彼は、それだけ言うと、どこかへ行ってしまった。

私、感じ悪かったかな。

すると私の冷えきった頬に、温かい物が触れた。

目の前にさっきの彼がいた。

「ココアとコーヒーどっちがいい？」

「…ココア。」

彼は私にココアを差しだすと、

「何があったか知らないけど、あんま泣くなよ。」

そう言っただけを向いた彼に私は、「待って。」

と言っていた。

「やっぱり聞いて。」

彼は私の隣に座って、コーヒーの缶をあけた。

私は、今日の事を全て話した。

彼は黙って聞いていた。

話し終わって、込み上げてくる涙を抑えるために、少し冷えかけたココアを一気に飲む。

「聞いてくれて、ありがとね。」

私は、それを言い終わったと同時に来たバスに乗った。

彼はバスの外から私に向かって手を振った。

名前も知らない男の子だったけれど、彼が話を聞いてくれたから、私の気持ちの雲はすっかり晴れていた。

バスの外を見るといつの間にか雨は上がって月が輝いていた。

（後書き）

最後で読んでいただきありがとうございます。
意味不明だったと思いますm（| |）m
アドバイスくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1039r/>

あるバスの終点で

2011年10月8日19時10分発行